

原著論文

オスカー・ワイルドの「風習喜劇」論考（3）

——『ウィンドミア卿夫人の扇』と『つまらぬ女』について——

菊池 せつ子

A study of 'Comedy of Manners' by Oscar Wilde (3)

——Lady Windermere's Fan and A Woman of No Importance——

Setsuko KIKUCHI

Abstract

The theme of 'comedy of manners' will be studied, focusing Lady Windermere's Fan (1892), Oscar Wilde's first work and the second, A Woman of No Importance (1893) continuing 13, 14 volumes in the bulletin. Oscar Wilde first found his authentic voice as a playwright and succeeds in formulating a distinctive style and method, because he was familiar with melodrama and superficially depicted Victorian (Puritan) moral values in these comedies of manners.

In Lady Windermere's Fan, Lady Windermere, the heroine who misunderstood the relationship between her husband and Mrs. Erlynne, is on the posing of eloping with Lord Darlington. The fact is that Mrs. Erlynne is her real mother and her husband tries to help his mother-in-law. In the end, Mrs. Erlynne tactfully helps her daughter's dilemma with a fan, waking up her maternal instinct. 'A dandy' character was a trade mark in Wilde's two former comedies of manners. But in this debut work, dandies were inadequate to sketch for the dramatist and appeared immature ones.

The theme in A Woman of No Importance, like Lady Windermere's Fan, concerns a woman with a secret past. Mrs. Arbuthnot and Lord Illingworth, who was her former lover and her son Gerald's natural father but left her mercilessly, meet unexpectedly 20 years later. Lord Illingworth, not knowing who Gerald is but attracted to him, offers him a post as his private secretary. But Mrs. Arbuthnot, the woman of the title, rejects, and insults Lord Illingworth, and her final curtain-line, 'A man of no importance', overturns his 'A woman of no importance' in Act I.

To make a strain in the structure, Lord Illingworth, a dandy who is Wilde's incarnation forces a kiss on the young Puritan American, Hester Worsely and accordingly Gerald prepares to strike him in outraged retaliation. In the end, Lord Illingworth is dismissed. But Lord Illingworth is proud of being 'a modern dandy' and declares 'The future belongs to the dandy', retorting 'Puritanism is shallow, selfish and foolish.' Finally he is self-satisfied with his paradoxical victory like Wilde, the true dandy in the Victorian Age. The dramatist tried to challenge his Age through his four 'comedies of manners'.

Key words : Immature Dandies, A Modern Decadent Individualist, Paradoxical Victory
キーワード：未熟なダンディーたち、モダンな世紀末の個人主義者、逆説的な勝利

はじめに

オスカー・ワイルドが「風習喜劇」('Comedy of Manners') を書くきっかけになったのは、セント・ジュームズ劇場のマネージャー、ジョージ・アレキサンダーがワイルドのウィットとドラマティストとしての才能に目をつけ依頼したことによる。契約金の100ポンドを使い果たしてしまった浪費家の彼は、生活のためにいや応なしに書かざるをえなくなり、ウィンドミア湖畔で完成したのが場所名をタイトルに入れた『ウィンドミア卿夫人の扇』(Lady Windermere's Fan, 1892年初演)であり、二作目が『つまらぬ女』(A Woman of No Importance, 1893年初演)であった。金銭的成功がワイルドに4作の「風習喜劇」を書かせる結果となったことは否定できない事実であった(拙著『武蔵丘短期大学紀要』第13、14巻参照)。

しかし、彼の人生観つまり生きることを芸術と考へ、作品そのものは、自分の人生からこぼれ落ちる副産物としか考へない彼の芸術的な人生観(芸術至上主義)からすれば、彼の生活の主旨から逸脱する「副産物」が生まれるはずがない。つまり、ワイルドの「風習喜劇」の持つ「シリアス」で「メロドラマティック」な面は、彼の本質的な要素から考へた場合最もありえない産物であると思われ、非凡な才能の持ち主である唯美主義者ワイルドが、生み出す作品とは到底考へられない代物であると言える。

しかも、ワイルドは、メロドラマ的^①というか、低俗なシンパシーを買うような代物を心から軽蔑していた。彼の「風習喜劇」に描かれている単純で軽薄な道徳性は、彼の実生活の行動や発言、そして他の諸作品から判断した場合これらの劇の発生はとても考へられないのである。生活と同様自分の楽しみのために劇を書くことを身上としたワイルドにとって、「風習喜劇」の真意がますます疑われるというものである。つまり、「風習喜劇」の結末に見られる道徳性は、ワイルドが忌み嫌っていたピューリタンの精神性であり、しかも表面上はその勝利で終わっているのである。ピューリタニズムを取り入れることが、ヴィクトリア時代

の観客を欺く手段であったとすれば、彼の「風習喜劇」における真意は一体どこにあったのか。

本稿では、オスカー・ワイルドの4編の「風習喜劇」の中で、デビュー作『ウィンドミア卿夫人の扇』と第二作目の『つまらぬ女』に焦点を当て、ワイルドが「風習喜劇」の中で追い求めたテーマ、特に「ヴィクトリア時代におけるピューリタニズムとダンディズム」について前稿に引き続き論考する。

失速する「過去の罪への恐喝」の手法

前述したように、オスカー・ワイルドが劇作家としての地位を確立したのは、『ウィンドミア卿夫人の扇』によってであった。これまでのイギリス演劇界の沈滞に対する不満を爆発させたかのように、人々はこれを歓迎した。もちろん、ワイルドにとっても予想外のことであったが。これまでに『ベラ』(Vera, 1883年初演)や『パデュア公爵夫人』(The Duchess of Padua, 1891年初演)などの作品はあるが、やはりこの『ウィンドミア卿夫人の扇』が、実質的に成功した最初の作品と見てよいだろう。その意味で、これまで紹介してきた二つの「風習喜劇」、『理想の夫』(An Ideal Husband, 1895年初演)、『まじめが肝心』(The Importance of Being Earnest, 1895年初演)(同じく拙著、第13、14巻参照)に比較すると、若干の思い切りの悪さ・不統一・軽快さの不足といったような欠陥が気になるが、彼の主張したいことはやはり盛り込まれている。

この作品、『ウィンドミア卿夫人の扇』においても『理想の夫』と同様に、「過去に犯した罪」ということが中心的テーマとして浮かび上がってくる。ただ、後者と異なる点は、この劇の実質的な主人公アーリン夫人(Mrs. Erlynne)という女性が犯した罪は、ロバート・チルターン卿(『理想の夫』の野心ある政治家)のそれとは違い、金銭・地位・権力といった俗物的要素に左右されたものではないということである。その意味で、アーリン夫人の過ちは「美的罪悪」に該当するように思われる。

この劇の大筋はというと次のようである。ウィ

ンダミア卿夫人 (Lady Windermere) が成人 (21歳) になったのを祝う舞踏会が開かれることになる。その頃、愛妻家の誉れ高い夫のウィンダミア卿 (Lord Windermere) にアーリン夫人という愛人がいるという噂が、ロンドン社交界に広まっていた。多額の金をアーリン夫人に与え、毎日彼が彼女の家に通っているというのである。ウィンダミア卿夫人は夫にそれを問い詰めるが、彼は頑なに口をつぐみ真相を語ろうとしない。それだけでなく、あろうことか夫はこの夜の舞踏会に、彼の愛人とされているアーリン夫人を招待するように妻に強要する (西洋社交界の形式上の主催は、主人ではなく夫人である)。愛人を正式に表社交界に招待するという事は、「愛人の勝利」つまり「妻の敗北」を意味する。妻にとってこれほどの屈辱はないというわけである。

一方人妻であるウィンダミア卿夫人に、激しく求愛しているダーリントン卿 (Lord Darlington) という独身貴族がいた。ウィンダミア卿夫人は彼に多少の好感を持っていたが、愛しているわけではなかった。だが、舞踏会で夫がアーリン夫人とダンスをしている姿を目の当たりにした傷心のウィンダミア卿夫人は、ひどく混乱し、愛してもいないダーリントン卿の元に走るという暴挙 (奇しくもこの行為は実母と同じであった) に出る、夫にメモを残して。そのメモに気がついたのは夫、ウィンダミア卿ではなく、偶然来合わせていたアーリン夫人だった。そしてそのメモを盗み見た、したたかと思われたアーリン夫人にも衝撃が走る。「娘 (実はウィンダミア卿夫人とアーリン夫人は親子の関係) は私と同じ過ちを犯そうとしている。このメモの文面も私が20年前、夫に書いたものと同じ内容だ。何とかして娘を助けなければならない」と思ったアーリン夫人は、「扇」を巧みに利用し、さらに自分を犠牲にしてまでも、娘ウィンダミア卿夫人の窮地を救うというストーリーである。

ではこの劇において、ウィンダミア卿夫人の衝動的な家出の原因であり「悲劇の元凶」となる、夫であるウィンダミア卿とアーリン夫人の関係は何だったのか。劇が進むにつれて、謎が明かされ核心へと近づいていく。真実は「ヴィクトリア時

代の厳格なピューリタン教育を受けて育ったウィンダミア卿夫人が、彼女の母が裏社交界の女性であることを知れば、どれほどショックを受けるかを推し量った愛妻家のウィンダミア卿が妻に配慮して、20年ぶりにイギリスに舞い戻ってきたアーリン夫人に、過去の秘密を口外しないための口止め料として大金を払っていた」に過ぎないのである。つまり、ウィンダミア卿夫人の母アーリン夫人は、子供 (ウィンダミア卿夫人) を生んでまもなく、別の男との深い関係により夫と子供を捨てて、家を飛び出してしまったという過去があるのである。さらにあろうことか、彼女は約20年ぶりに娘の夫ウィンダミア卿の前に突然姿を現し、イギリスの表社交界に復帰したいために援助を頼むような、奔放で自分勝手とも言える派手好きな女性であった。

ワイルドは、『理想の夫』のチェヴリー夫人と同様に (拙著13巻、参照)、「恐喝」という手法を使用することによって、サスペンスを盛り上げようとする。ところが、『理想の夫』に比べると、ウィンダミア卿がアーリン夫人に恐喝されなければならない根拠は、少なからず非現実的であるという感は拭えない。つまり、「過去に罪を犯したために世間から憎悪の目で見られながら、今でも男関係でスキャンダルの絶えない女が、まじめで品行方正な娘の前に母親として名乗りをあげて登場すれば、娘は恥ずかしい思いをするはずである。妻に恥をかかせたくないならば、自分を社交界に復帰させなさい」と、実母らしからぬ論理でウィンダミア卿を恐喝するわけである。しかし、チェヴリー夫人のチルターン卿 (未来の首相候補とも言える若き政治家) への過去の汚職事件に関する恐喝に比べれば、この作品におけるウィンダミア卿に対するアーリン夫人の恐喝は、説得力が不足し迫力が乏しいと言わざるをえない。

未熟なダンディー達

また、そのような破廉恥な母親アーリン夫人が、誤解により夫と亀裂が生じそれほど愛していない男の元に走ろうとする娘の危機に直面したとき、突然母性本能に目覚めいわゆる「善良な女」と化

し、道徳を娘に説くあたりは何か不調和なものを感じざるをえない。このアーリン夫人の突然の変化は、『理想の夫』の中で、親友のゴーリング卿がチルターン夫妻の危急を救うために、一時的に俗物のレベルに近づいていったのと似ているようであるが、ゴーリングは前にも言ったとおりダンディーとしての余裕、言い換えれば小説のナレーターの冷静さを持っていた。つまり、彼は自分は彼らとは異なる人種であると宣言した上での接近であった(拙著13巻、参照)。

しかし、アーリン夫人の場合は、形振りかまわぬかなりファナティック(狂信的)な行動である。ダンディーとしての「常識」を突き放した態度はまったく見られない。これは、ワイルドのその後の劇と比較すれば物足りない点であり、当時流行の低俗なメロドラマの影響を脱しきっていないという欠陥でもある。彼はこの頃すでに彼の最高傑作と言われる、長編小説『ドリアン・グレイの肖像画』(The Picture of Dorian Gray, 1890年)を書いていた。つまり、彼の創作活動としては全盛期を迎えていたのである。しかし、演劇という幾分大衆性の濃い芸術分野においては、若干の当惑と不安感があったのだろうか、その後の2作(『理想の夫』、『まじめが肝心』)に見られる、登場人物たちの描写における思い切りの良い筆捌き、このデビュー作では発揮できなかったようである。

以上の点は、ウィングミア卿夫人に横恋慕するダーリントン卿という人物の存在にも言えることである。ダーリントン卿という人物は、おそらくイリングワース(Lord Illingworth, 『つまらない女』)、ゴーリングといった人物になりえたと思われる。第一幕での彼は確かにその片鱗が垣間見られた。例えば、彼とウィングミア卿夫人との会話にそれが十分感じられるからである。

LADY WINDERMERE. ...Believe me, you are better than most other men, and I sometimes think you pretend to be worse.
LORD DARLINGTON. We all have our little vanities, Lady Windermere.
LADY WINDERMERE. (Still seated at table

L.) Why do you make that your special one?
LORD DARLINGTON. (still seated L.C.) Oh, nowadays so many conceited people go about Society pretending to be good, that I think it shows rather a sweet and modest disposition to pretend to be bad. Besides, there is this to be said. If you pretend to be good, the world takes you very seriously. If you pretend to be bad, it doesn't. Such is the astounding stupidity of optimism.⁽²⁾

ウィングミア卿夫人 あなたは普通の男性に比べたら、ずっといい方なんです。でもあなたは悪人ぶっていらっしゃるのではないかと思う事が時々ありますわ。

ダーリントン卿 そりゃ誰だって、ちょっとした見栄くらいはありますからね。

ウィングミア卿夫人 でもあなたは、どうしてそんなことで見栄をはるのですか。

ダーリントン卿 だって、最近では善人ぶった連中が社交界にのさばっていますので、悪人ぶったほうがむしろ、優しくて謙虚な人間だと思ってもらえるのじゃないでしょうか。それに、こんなことも言えますよ。もし、人が善人ぶれば、世間はその人をまじめに扱う。悪人ぶれば、そうはしない。驚くほど世の中の連中は楽天的ですよ。(西村孝次訳、これ以降特記なき場合は西村訳)

「悪人ぶったほうが、優しくて謙虚な人間だと思われる」や「人が善人ぶれば、世間はその人をまじめに扱う、悪人ぶれば、そうはしない」と言って憚らない、この頃のダーリントン卿はワイルドの代弁者といった感がある。しかし、そのダンディーが、厳格なピューリタンであるウィングミア卿夫人に求愛しまじめな人間になってしまうあたりは、生粋のダンディー、ゴーリング卿が急に俗物ロバート・チルターン卿になってしまうような違和感がある。そして、この人物(ダーリントン卿)はこの劇の途中で完全に姿を消してしまうことになるのであるが、作者ワイルドが、彼の描き方が不満足だったと感じたせいかもしれない。

さらに、ウィングミア卿夫人の実母であるアー

リン夫人に熱烈に求婚する、オーガスタス卿 (Lord Augustus Lorton) もダーリントン同様、真のダンディーとは言いがたい。なぜなら、型破りで破廉恥な生活は、ダンディーとしての資質・資格を想起させるところはあるが、彼にはダンディーとしての肝心な確たるフィロソフィーがないのである。その意味でこの人物も真のダンディーとはならず、単なる「遊び人」の域を出ていない。このようにこの作品の登場人物は大体において、作者ワイルドのダンディー振りを代弁するという点で未熟さを脱しきれていない。

しかしワイルドはこの劇の最終段階で、主人公のアーリン夫人の軌道修正を行い、次作以降の橋渡しのワイルドらしい部分の萌芽もある。それはタイトルにもなっている小道具の「扇」を巧みに利用し、アーリン夫人が娘の身代わりとなり娘の危機を救い、「善良な女」として甦がえったかのように見えた時の行動である。ウィンダミア卿夫妻の彼女への憎しみも消えた時、娘ウィンダミア卿夫人と孫の前から姿を消そうとする場面に見られる、アーリン夫人の去り際の態度である。

MRS. ERLYNNE. ...I have no ambition to play the part of a mother. Only once in my life have I known a mother's feelings. That was last night. They were terrible—they made me suffer—they made me suffer too much. For twenty years, as you say, I have lived childless—I want to live childless still ... Besides, my dear Windermere, how on earth could I pose as a mother with a grown-up daughter? Margaret is twenty-one, and I have never admitted that I am more than twenty-nine, or thirty at the most. ...I had no heart. I find I have, and a heart doesn't suit me, Windermere. Somehow it doesn't go with modern dress. It looks one old.⁽³⁾

私には母親の役割を演ずるなんて大それた芸当はできませんわ。ただ、一生に一度だけですが、母親の情というものを感じたことはございました。それは昨夜のことですよ。でも、母親の情っていうものは、スマートじゃございませんわ…私は

まだ子供がない女ということでやっていきたいのです。第一、この私が、ねえ、ウィンダミア卿、大きな娘がいるなんて顔ができますかしら。マーガレット (ウィンダミア卿夫人) は21歳でしょう。私はこれまでずっと29歳か、せいぜい30歳でとおして来ているのですよ…私の心には情なんてものはないものと考えていたのですが、やはりあることに昨夜気がつきましたわ。でも、情というのは、モダンなドレスにはマッチしないでしょう。老けて見えますものね。(年齢表記、横書きのため筆者が訳本の漢数字を算用数字に変更)

この場面は一見センチメンタルに感じられるが、彼女の態度はセンチメンタルという湿っぽい感情を消し去っている。つまり、アーリン夫人は「一人さびしく」娘の前から姿を消してはいないのである。彼女は悪名高いオーガスタス卿と結婚することによって、自分の「善良性」を否定し既成概念に迎合せず、現代的な女性の生き様を貫き通すアーリン夫人の姿が浮き彫りとなるからである。ウィンダミア卿に別れの際に言う彼女の言葉、「でも、情というものは、モダンなドレスにはマッチしないでしょう。老けて見えますものね」は、劇作家ワイルドにとって、アーリン夫人を自分の代弁者に仕立てる最後の努力の跡が見られる。

さらに作者ワイルドにとって、この劇において成功したと思われる登場人物もいる。それは、ダンディーたちの好敵手、ベリック公爵夫人 (The Duchess of Berwick) とその娘アガサ (Lady Agatha Carlisle) である。夫人は『まじめが肝心』のブラックネル夫人に匹敵するほどの怪物 (ゴーゴン) として描かれている。娘の婿探しに躍起になり、金のある男ならどんな人間でもよいと考え、オーストラリアの成金の息子で幾分お頭の弱そうなホッパー (Mr. Hopper) という男に目を付け、機嫌をとっている姿は驚くほど世俗的である。しかも、その娘アガサは母の言うことは何でも忠実に守り、舞台での科白は、「ハイ、ママ」 ("Yes, mamma.") だけである。もしかしたら、ひどく深みのある女性なのではないかと疑いたくなるほど単純な娘であるアガサは、ヴィクトリア時代特有の「リトル・ゴーゴン」とも呼んでよい

ほどの小怪物である(同じく、拙著14巻参照)。

しかし総じてワイルドのダンディズムは、この作品では試作段階にとどまったと言える。彼の劇作家としてのヴィクトリア時代への挑戦は、「風習喜劇」においては、第二作目以降を待たねばならなかったのである。そしてデビュー作、『ウィングミア卿夫人の扇』のアーリン夫人、ダーリントン卿、それにオーガスタス卿は化粧直しを施して、第二作目以降に、ピューリタニズム(清教徒主義)の精神重視主義が横行するヴィクトリア時代の中で彼のダンディズムを開花させていくことになる。

ピューリタン対ダンディー

『ウィングミア卿夫人の扇』に続く、ワイルドの「風習喜劇」の第二作目『つまらない女』について見てみることにする。この作品のプロットは前者のそれと類似点が多い。イリングワース卿(Lord Illingworth)という個人主義者の犠牲になった女性(結婚を信じて彼の子供を身ごもった後、捨てられる)、アーバスノット夫人(Mrs. Arbuthnot)が、女手一つで二人の間でできた子供ジェラルド(Gerald)を育てる。息子は成人して父とは知らずに、イリングワース卿の名声・地位・実力に引かれ、彼の秘書になることを決意する。この青年にとって、地方銀行の行員から一流の世界にのし上がる絶好のチャンスであったわけだ。しかしその後、母の愛情の深さを肌で感じ、反対に父の身勝手さと背徳性を痛感し父を軽蔑し、母と恋人ヘスター(Hester Worsley)と純粋なピューリタンの生活に戻り、その結果イリングワース卿は息子の信頼を失い敗北者となるというのが粗筋である。ヴィクトリア時代の観客にとっては安心できる筋書きであるが、ワイルドの真意は別のところにあるはずである。なぜなら彼の否定する「ピューリタニズム」、「ヴィクトリア朝の過度な精神性の重視」、それに「個人主義排斥の思想」がすべてこの劇の結末に見受けられるからである。

ワイルドは「ダンディー」と「ピューリタン」という対立の構図を取り入れ、劇を盛り上げる効果を醸し出し、ピューリタンの代表としてアメリ

カ娘のヘスターがこの劇で重要な役割を果たしている。彼女は当時のアメリカ女性の通例に漏れず、厳格なピューリタンである。例えば、「一度罪を犯した女性は罰せられるべきですね」("Let all women who have sinned be punished.")⁽⁴⁾と妥協を許さないのは、ウィングミア卿夫人や『理想の夫』のチルターン夫人と同様である。しかもヘスターはヨーロッパの世紀末の社交界の頹廃振りに怒りを覚え、アメリカのパイオニア精神の偉大性をとうとうと説く。

You shut out from your society the gentle and the good. You laugh at the simple and the pure ...Oh, your English society seems to me shallow, selfish, foolish ...It sits like a dead thing smeared with gold. It is all wrong, all wrong.⁽⁵⁾

あなた方は社交界から、優しい人、善良な人を追い出してしまったのですわ。あなた方は素朴で純粋な人をあざ笑うのです…イギリスの社交界は、私には浅はかで、利己的で、馬鹿みたいに見えます…死者に黄金をなすり付けたようなものです。すべてが間違っています。

ヘスターは、ピューリタンの人生観を至極ごもともといった風に、「優しさ」「善良さ」「素朴さ」「純粋さ」の価値、さらに「誠意」「労働の尊さ」などを大真面目に説教する。彼女のピューリタニズムの観点からは、イギリスの社交界は完全に「浅はかで利己的で馬鹿げており」、その中の花形的存在であるイリングワース卿やアランビー夫人(Mrs. Allonby)などは彼女にとって完全に悪者となっている。

ところが、ピューリタンの発想の人間が「浅はかで利己的」なことと称するものは、違った観点・主義を持った人間から見た場合果たしてそうであろうか。人間の経験する多様な情熱や、それによって生じる青春時代の過失・欲望・野心などすべてを否定し、罪を犯したといわれる人間は容赦なく罰せられねばならないのかというと、決してそのように単純に律すべきでないことは自明である。ピューリタンの称する「素朴で純粋な」ものとは、

諸刃の剣として彼ら自身を責める言葉にもなり得る。言い換えれば、彼らの否定する「浅はかで利己的で馬鹿げた」ことは、実は彼ら自身に当てはまるとも言えるのではないだろうか。素朴で純粹という信念は、いわゆるきれい事という衣によって武装した偽善であって、その意味で彼らこそ「浅はかで利己的で馬鹿な人間」ともなってしまうという落とし穴がある。

ワイルドの化身、ダンディーとして登場しているイリングワース卿が、ジェラルドを自分の息子だと知り、20年ぶりに再会したかつての愛人アーバスノット夫人と息子の将来について議論する時、彼はアーバスノット夫人に、「君はセンチメンタルな話し方をするね、それにいつも利己的だ」("What a typical woman you are! You talk sentimentally, and you are thoroughly selfish the whole time.")⁽⁶⁾と言うところがある。イリングワース卿は自分の「個人主義」のために、彼女を弄んで彼女の心情を顧みることなくとも簡単に捨てた。そのために苦労して息子を育て上げたアーバスノット夫人にとって、今頃になって(20年後)、自分の手で息子を育てたいという彼の希望は、あまりにも身勝手であると非難する彼女の論理と感情は自然であると思われる。しかし、そういった彼女の感情・姿勢についても見方を変えれば、息子の「個人」を完全に無視した母親の「利己主義」がちらほら見え隠れするのを、イリングワースはダンディー流に指摘する。イリングワース卿は、そのような「過去」にこだわる女の態度を「センチメンタル」(感傷的な)であり、「セルフフィッシュ」(利己主義の)であると、彼特有の「個人主義」の理屈を振りかざし切り捨てる。

The history of woman is the history of the worst form of tyranny the world has ever known. The tyranny of the weak over the strong. It is the only tyranny that lasts.⁽⁷⁾

女の歴史はすべての暴虐のうちで最も恐ろしい暴虐の歴史だよ。弱いものが強いものを虐待するわけだ。この暴政は長続きして、崩壊する事はないよ。

弱者(アーバスノット夫人)が弱者であるがゆえに、強者(イリングワース卿)を責め非難する正当性、弱者であることを嘆き悲しむ一種の自己憐憫、マゾヒスティックな感情の爆発、これらすべては強者にとって処しがたい難物となる。そのような確固たる事実は、正論によって打破する事は不可能に近いのである。ピューリタニズム全盛のヴィクトリア時代において、不可能なことを成就するには、正攻法に頼ってはだめであるとイリングワースは悟るのである。残されている方法とはいうと、ダンディーお得意のパラドックスやユーモアによって逃げるという手段しかないのである。

モダンな世紀末的個人主義者

アーバスノット夫人にとって、「つまらぬ男」('A man of no importance')と成り果てた、昔の恋人イリングワース卿は、ダンディーであることを誇示するかのよう、起死回生とも言える無謀な行動に出て劇は急展開を見せる。つまり、イリングワース卿が、あろうことか第三幕で、ジェラルドの恋人で生粋のピューリタンであるヘスターにキスしようとする。この行為は、もちろんこの劇において重大な意味をもたらす。それまで崇拝していた父親の偶像が、ジェラルドから完全に消える結果となるからである。息子の恋人に対してこうした非道徳な行為をすれば、息子の信頼を失うことになるということはイリングワース卿自身にも当然予想されたはずである。

しかしこの行為は常識とモラルを超えた、ダンディー特有の異次元の観点から理解しなければならないと言える。イリングワースはピューリタンのヘスター、そしてアーバスノット、ジェラルドという身内たちの世界観の中では、孤立し敗北することは十分意識していた。彼の「世紀末的個人主義」の中に、息子であろうとも、ピューリタンの異次元のものを同化させる事はできないと悟ったと思われる。しかも、ダンディーのイリングワースにとっては、センチメンタルな敗北または孤立もあり得ないのである。さらに、過去の罪を悔い涙ながらに息子と別れるというメロドラマ的姿勢も、ダンディーの美学に反する行為であり、彼に

とっては死んでもできない相談と言える。

それならば、自ら決定的な非道徳な行為によって、自決するのがダンディーの宿命であると判断したのである。息子の恋人をしかも美人のピューリタンを襲うイリングワースの姿は、「世紀末的個人主義」と「ピューリタニズム」の対決という基本的な対決の意義がここに潜むことは事実であるが、それと同様に、ヴィクトリア時代における「古さ」と「新しさ」の対立の姿を象徴し具現化するものであったとも言えるのである。

ワイルドは、「モダン」(現代的な)という言葉の盛んに使用し、事実、それは当時の一大流行語であったわけであるが、この語の中にずいぶん色々な意味を含有させていた。「ビューティフル」「ピクチャレスク」「カラフル」などの語と同様に、彼の思想と行為のすべてを象徴していた様に思われる。前述したとおり、ヴィクトリア時代の強大な勢力を持つ常識という非常識な怪物(ゴーゴン)と同一線上で闘うことは所詮不可能であり、この怪物を退治するためには、「世紀末的個人主義者」にとって簡潔な呪文のような言葉「モダン」しかなかったのである。

イリングワースの自決、言い換えれば、ダンディーらしいカラフルでピクチャレスクな敗北表明は、実にピューリタンの娘を襲うという「モダン」な行為によってなされた。このような視点でイリングワースを見た場合、頹廢的というよりもむしろ果敢で力強い生き様を持った男のイメージが浮かび上がる。逆に、既成概念や道徳にしがみついている、ヘスターやジェラルドは年齢的には若いにもかかわらず、老いて醜悪なイメージすら感じられるのである。イリングワース卿の「若さ」はその意味で、「新しい世紀へのエネルギー」の具現であるとも言えるのではなからうか。以上の点で彼の決然たる敗北表明の大きさに比較すれば、ピューリタンたちの勝利のスケールの小ささ、というよりも敗北すら読み取れるのである。

さらに第三幕は、ジェラルドの実父がイリングワースであることが判明した状況で終わるわけであるが、続く第四幕では、ジェラルドが父であるイリングワースの母に対する若き日の仕打ちを知り、軽蔑しさらに絶望するが冷静さを取り戻し熟

慮した後、母と父とが正式に結婚するのが最善の策であるというピューリタンの結論を得るに至る。そして父親であるイリングワースにその旨の手紙を書くが、母親であるアーバスノット夫人は、イリングワースの結婚の申し出をきっぱりと拒否する。

イリングワースがアーバスノット家を訪問するシーンにおいて、ピューリタンの家に入った彼は宇宙からやってきたエイリアンといったような、別世界に対する違和感すら覚え、「世紀末的個人主義」を正当化するかのように自分の心境を語る。

LORD ILLINGWORTH. (sitting down) Last night was excessively unfortunate. That silly Puritan girl making a scene merely because I wanted to kiss her. What harm is there in a kiss?

MRS ARBUTHNOT. (turning round) A kiss may ruin with a human life, George Harford. I know that too well.

LORD ILLINGWORTH. We won't discuss that at present. What is of importance today, as yesterday, is still our son. I am extremely fond of him, as you know, and odd though it may seem to you, I admired his conduct last night immensely. He took up the cudgels for that pretty prude with wonderful promptitude ...Except that no son of mine should ever take the side of the Puritans: that is always an error. Now I propose is this. ⁽⁸⁾

イリングワース卿 昨夜ひどく不幸だった。あの馬鹿なピューリタン娘が、たかが、私がキスをしようとしただけで、大騒ぎしおって、キスぐらいどうしたというのだ。

アーバスノット夫人 一度のキスで一生を台無しにすることだってありますわ、ジョージ・ハフォード。私には、それがよくわかっています。

イリングワース卿 そんなことをいまさら議論したって仕方ないじゃないか。今、重要なことは、昨日もそうであったように、私たちの息子のことだろう。君も知っての通り、私はあいつがす

ごく好きだ。それに、君には奇妙に思えるかもしれないが、あいつの昨夜の行動は立派だと思うよ…ただしわが息子たるものはいやしくも清教徒の味方などすべきではない。それはいつだって過失だから。ところで、君に提案したいことは…

という風に、イリングワースは、ピューリタン娘の潔癖症を嘲笑・揶揄しながら、息子のことで条件を提示する。その条件とは、半年ずつ息子と一緒に暮らすというものである。アーバスノット夫人は、もちろん彼の申し出を拒否する。そのような問答の途中、ジェラルドが父であるイリングワースに書いた手紙が放置されているのに気がつき、彼はそれを読む。アーバスノット夫人を「つまらぬ女」(A woman of no importance) (第一幕終わりでの彼の科白)と言及し、虚勢を張っていた彼は、アーバスノット夫人と結婚する気などなかったが、息子を手に入れるためにはその犠牲を払ってもかまわないと、ダンディーにはあるまじきことを提案し、彼にしてみれば最大の譲歩をする。

I don't admit for a moment that the boy is right in what he says. I don't admit that is any duty of mine to marry you. I deny it entirely. But to get my son back I am ready—yes, I am ready to marry you, Rachel—and to treat you always with the deference and respect due to my wife. I will marry you as soon as you choose. I give you my word of honour. ⁽⁹⁾

私はあいつの言うことが正しいとは全然思っていない。君と結婚するのが、私の義務だとも思わないね。きっぱりと拒否するよ。だけどね、息子を取り戻すためには、君と結婚してもよいと思っている。君を私の妻にふさわしい敬意と尊敬の念で接していこうとも考えている。君のご希望通り、いつでも結婚するよ。誓いの言葉も言おう。

息子を取り戻すために、自分の身上である「世紀末的個人主義」を捨て、結婚という「旧式」な

制度をやむなく覚悟したイリングワース卿ではあるが、アーバスノット夫人は前に彼に言われた言葉のお返しを盛り込み、毅然とした態度で拒否する。その間の緊迫した二人の簡潔な会話は、劇作家ワイルドの真骨頂が発揮され興味深い場面となっている。

LORD ILLINGWORTH. So you really refuse to marry me?

MRS ARBUTHNOT. Yes.

LORD ILLINGWORTH. Because you hate me?

MRS ARBUTHNOT. Yes.

LORD ILLINGWORTH. And does my son hate me as you do?

MRS ARBUTHNOT. No.

LORD ILLINGWORTH. I am glad of that, Rachel.

MRS ARBUTHNOT. He merely despises you.

LORD ILLINGWORTH. What a pity! What a pity for him, I mean.

MRS ARBUTHNOT. Don't be deceived, George. Children begin by loving their parents. After a time they judge them. Rarely if ever do they forgive them.

LORD ILLINGWORTH. (reads letter over again, very slowly) May I ask by what arguments you made the boy who wrote this letter, this beautiful, passionate letter believe that you should not marry his father, the father of your own child?

MRS ARBUTHNOT. It was not I who made him see it. It was another.

LORD ILLINGWORTH. What fin-de-siècle person?

MRS ARBUTHNOT. The Puritan, Lord Illingworth. ⁽¹⁰⁾

イリングワース卿 それじゃ、君は私との結婚をどうしても断るといふのかね。

アーバスノット夫人 そうです。

イリングワース卿 私を憎んでいるからだね。

アーバスノット夫人 そうです。

イリングワース卿 息子も君と同じように私を憎んでいるのかね。

アーバスノット夫人 いいえ。

イリングワース卿 それはよかった。レイチェル。

アーバスノット夫人 あの子はあなたを軽蔑してただけですわ。

イリングワース卿 それは残念だ。彼にとってね。

アーバスノット夫人 間違わないでください。ジョージ。子供というのは、はじめのうちは両親を愛しますが、その後は両親を裁くものなのです。しかも、滅多に許してくれることはありませんわ。

イリングワース卿 [手紙をもう一度読み直してから、ゆっくりした調子で] この美しい、情熱的な手紙を書いた息子にどう説得して、君が私と結婚しなくてもよいと思わせたのかね。

アーバスノット夫人 彼にそう思わせたのは、私ではありません。別の人ですわ。

イリングワース卿 その世紀末の人間は誰かね。

アーバスノット夫人 あのピューリタンのお嬢さんですわ、イリングワース卿。

母がイリングワース卿と正式に結婚するのが適切だと考えていたジェラルドが、最終的にそうすべきでないという結論を得たのは、恋人である厳格なピューリタンのヘスターの説得によるものであった。イリングワースにしてみれば最大級の妥協と譲歩によって、結婚という慣習的(ピューリタンの)儀式を受け入れようとしたのであるが、それを否定したのがヘスターであった。ピューリタンの厳格性が常識的見地から判断すれば、いわば皮肉にも非道徳な行為を勧奨した結果になる。その意味では、ピューリタンのモラルは世紀末の頹廢的世界観と偶然符合したわけであり、イリングワースも苦笑せざるをえない結果になったと言える。

ダンディーのパラドクシカルな勝利

ピューリタンの潔癖性を持つヘスターが、清教徒的「真の愛」をアーバスノット夫人やジェラルドに教え諭したことによって、イリングワースは

敗北したのであろうか。なるほど、三人の結末の前に彼は退却せざるをえなくなる。そして、次のイリングワースの科白は何か負け惜しみのように感じられることも事実でもある。

Upon my word, Rachel, no woman ever loved me as you did. Why, you gave yourself to me like a flower, to do anything I liked with. You were the prettiest of playthings, the most fascinating of small romances ... (Pulls out watch) Quarter to two! Must be strolling back to Hunstanton. Don't suppose I shall see you there again. I'm sorry, I am, really. It's been an amusing experience to have met amongst people of one's own rank, and treated quite seriously too, one's mistress, and one's— (III)

実際、君ほど私を愛してくれた女はいないよ、レイチェル。君は花のように、私に身を任せてくれた。玩具にする女のうちに、一番可愛い女だったし、ちょっとしたロマンスの相手には一番魅力があったね。…… [時計を出して] もう2時15分前か。ハンスタントンの家に行かねばならんな。君には二度と会えるとは思わない。残念だ。だけど、丁重に扱われている私ども貴族階級の人々の集まりの中で、会うことができたのは、楽しい経験だったよ。自分の情婦(ミス・トレス)と自分の—— (同じく、時刻算用数字に筆者変更)

しかし、前述した第三幕の終わりの行為によって、イリングワース卿は自分の敗北を認識していたのである。というのは、捨て科白のように聞こえる「君が一番可愛い玩具だった」というアーバスノット夫人への言葉は、実は過去の自分そして現在の自分を認識している言葉であった。イリングワースの青春時代には、アーバスノット夫人は一人の「玩具」であった。そして、第三幕でのヘスターへの破滅的とも思える行為は、ヘスターを現在の「玩具」であるというダンディー、イリングワース流の「モダン」な自己主張であったからだ。

言い換えれば、第三幕以降のジェラルド、アー

バスノット夫人、ヘスターの苦悩と決断は、イリングワースの目からすれば、「滑稽な空騒ぎ」に映るわけである。つまり、ピューリタンたちのまじめな苦悩を前もって予知し、その生じるであろう当然の結果を、客観的に観察していたのではないかと推察できるのである。この劇で展開された一日足らずの出来事は、イリングワースにとっては彼の科白どおり「楽しい経験」であったわけだ。一生を支配するはずの出来事を「楽しい経験」といって退場するイリングワースと、一生を支配する出来事をそれにふさわしい苦悩で対処したピューリタンの姿を比較した場合、一般的な見方（当時の観客の視点）をすれば、後者は確かに「まじめ」で「誠実」であり「善良」でもある。

しかし、彼の「軽薄さ」には、ある種の逆説的とも言える「深み」も感じられる。というのは、「人間はあまりにも外面的過ぎて、外面の価値とは何か、さっぱりわかっちゃいない」や「一生に一度しか恋をしない人間は浅はかな人間だ」といったワイルドの発したアフォリズム（警句）の中に、ヴィクトリア時代のまじめさを風刺し、イマジネーションの欠如を嘲笑する「モダニティー」が感じられるからである。

イリングワースにしてみれば、「まじめ」「誠実」「善良」には、簡単に言えば進歩がないと思えるのである。なぜならこれら三つの「美德(バーチュ)」は、所詮、既成道徳概念の中で尊敬されるものに過ぎないからである。さらに、その枠を離れて考えた場合、つまり広い視野からヒューマニティーの未来を考えた場合、それらは邪魔なもの、否、「悪徳(バイス)」になりかねない。イリングワースの敗北は、その意味で小さな枠の中での敗北であった。しかし、当時（ヴィクトリア時代）の観客の多くには、それは喜ばしい敗北であり、安心できる結末を持つ劇と映ったであろう。だが、ワイルドは巧みに大衆を利用しつつ、真意を別のところにおいていたのである。つまり、ヴィクトリア時代の狭い枠の外側から見たとき、イリングワースの勝利は鮮明に浮かび上がってくるのである。それはダンディズムのパラドクシカルな勝利でもあった。

第三幕でイリングワースがジェラルドに次のよ

うに言うところがある。

Ah! She is not modern, and to be modern is the only thing worth being nowadays. You want to be modern, don't you, Gerald? You want to know life as it really is. Not to be put off with any old-fashioned theories about life. Well, what you have to do at present simply to fit yourself for the best society. A man who can dominate a London dinner-table can dominate the world. The future belongs to the dandy. It is exquisite who are going to rule. ⁽¹²⁾

ああ！君のお母さんはモダン（現代的）ではないね。モダンであるということだけが、今では価値があることなんだよ。君もそうなりたいたらう、ジェラルド？君も人生をありのままに見たいだらう。人生について古い考え方しか持たずに、時代に取り残されたくはないだらう。今、君がしなければならないことは、最高の社交界に通じるような人間になることだけだ。ロンドンのディナー・パーティーを支配できる男は、世界を支配できる。未来はダンディーのものだ。これから支配者になるのは洒落者なのだよ。

彼は息子に「モダン（現代的）」になり、「人生というものをありのままに見る」ことを勧めた。それは、殻に閉じこもることのない広い人生観を持ってということであった。「未来はダンディーだけのもの」とイリングワースが言うとき、それは決して外面的な意味だけのダンディーを意味するものではない。軽薄さを前面に出した深遠な人物、偽悪者のような人間を意味していたのである。従って、ワイルドの唱えるダンディズムは、「大衆無視」「健康の否定」「悪徳の誇示」「コモン・センスへの挑戦」「労働しない意義」といったような、世人（ヴィクトリア時代のピューリタン）から反発を買うような挑発的態度によって、逆に社会を啓蒙するという要素を帯びていたと言える。愚かなものを愚かと呼ぶ、時代に挑戦するような攻撃的な態度がなければ、真のダンディズムとは言えないというわけである。

おわりに

デビュー作『ウィンダミア卿夫人の扇』における、ウィンダミア卿夫人の実母、アーリン夫人の「情というものは、モダンなドレスには合わない」という最後の科白は、前述したように、「善良性」を否定し既成概念に迎合しない、現代的な女性像を浮き彫りにしている。さらに二作目の『つまらぬ女』のイリングワースが、大衆（ヴィクトリア時代のピューリタン）と孤立し、時代と闘争し、それに敗れる姿には作家ワイルドの逆説的なダンディズムの勝利が表明されている。「最高の社交界に入るための方法は、近頃では、人の虚栄心を満足させてやるか、人を楽しませるか、人にショックを与えることなんだ」("To get into the best society, nowadays, one has either to feed people, amuse people, or shock people—that is all.")¹³とイリングワースは言うが、まさに「ショック」を与えることとは、時代を「啓蒙する」という意味であったのである。

アーバスノット夫人、ジェラルド、ヘスターという三人のピューリタン（俗物）たちのスクラムの前に、立ち去っていくイリングワース卿の姿は、当時の観客にとっては拍手喝采の結末となっている。そして、ジェラルドがダンディーにならず「俗物」のままに満足し、さらにダンディーになることを拒否することによって、ヴィクトリア時代に安住する道を選択した時、ワイルドにとって彼らは時代の敗北者たちであった。

結局、劇作家ワイルドの真意は、イリングワースのように大衆に迎合せず果敢にモダンな行為をして、敗北していくダンディーの姿を描くことにあったことは否定できない。ダンディズムを軽薄であると非難する人間が、清教徒の精神重視主義の時代では、深みのある立派な人間だとして賞賛された。この愚かな精神重視主義を打ち破るべく、ワイルドは「風習喜劇」4編を書き、ダンディーの化身たちを登場させ、時代を変えようと努力を試みた。「世紀末的個人主義者」ワイルドの流儀は、妥協を許さない（ピューリタンの考え方と異質であるが）断固たる態度を、シリアスに言うの

ではなく、ユーモアとパラドックスで受け流すダンディーのショック療法であったのである。

ワイルドは、『つまらぬ女』のイリングワース卿同様、常軌を逸した罪悪感の欠如、モラルの無視といった態度により、完全な個人主義を一生涯貫き、芸術家にとっても最も必要とされている芸術至上主義を実生活において果敢に遂行し、大衆の非難も物ともせずダンディーとしての実生活を全うし、時代に挑戦し続けた作家であった。

（『ウィンダミア卿夫人』および『つまらぬ女』のテキストの頁数は、Wilde, Oscar. Lady Windermere's Fan, A Woman of No Importance, Oxford World's Classics Edited with an Introduction and Notes by Peter Raby, Oxford University Press, 1995による。）

Notes

- (1) 悲劇とは違い、登場人物の行動から人生や人間性について、深く考えさせるというよりは、衝撃的な展開を次々に提示する事で観客の情緒に直接訴えかける事を目的とする。扇情的だがドラマの中身が薄いことを指摘する意味で、この物語が侮蔑的に用いられる事がある。狭義には、メロドラマは19世紀にイギリスを中心にヨーロッパやアメリカ合衆国で流行した演劇スタイルを指す。フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』より。
- (2) Wilde, Oscar. Lady Windermere's Fan, 8
- (3) Wilde, Oscar. Lady Windermere's Fan, 54
- (4) Wilde, Oscar. A Woman of No Importance, 120
- (5) Wilde, Oscar. A Woman of No Importance, 119
- (6) Wilde, Oscar. A Woman of No Importance, 127-128
- (7) Wilde, Oscar. A Woman of No Importance, 133
- (8) Wilde, Oscar. A Woman of No Importance, 152-153
- (9) Wilde, Oscar. A Woman of No Importance,

- 155
- (10) Wilde, Oscar. A Woman of No Importance, 155-156
- (11) Wilde, Oscar. A Woman of No Importance, 156
- (12) Wilde, Oscar. A Woman of No Importance, 132
- (13) Wilde, Oscar. A Woman of No Importance, 132

活一』、創元社、1994年。

山田勝『階層のベル・エポック—世紀末からの夢と享楽—』、日本放送協会、1990年。

『ユリイカー総特集オスカー・ワイルドの世界4月臨時増刊—』、第32巻第6号、青土社、2000年。

ワイルド、オスカー（西村孝次訳）『オスカー・ワイルド全集2』、青土社、1989年。

Works Cited and Consulted

Brown, Prewitt Julia. Oscar Wilde's Philosophy of Art, University Press of Virginia, 1997.

Symons, Arthur. A Study of Oscar Wilde selected and with an introduction by Karl Beckson, Hon-No-Tomasha, Tokyo, 1997. (復刻版)

Wilde, Oscar. A Happy Prince and Other Stories, Penguin Book, 1993.

Wilde, Oscar. The Importance of Being Earnest, Oxford World's Classics Edited with an Introduction and Notes by Peter Raby, Oxford University Press, 1995.

Wilde, Oscar. A Women of No Importance, Lady Windermere's Fan, An Ideal Husband, Oxford World's Classics Edited with an Introduction and Notes by Peter Raby, Oxford University Press, 1995.

海老池俊治『ヴィクトリア時代の小説—社会史的背景を考慮して—』、南雲堂、1958年。

坂本和夫、来住正三編『イギリス・アメリカ演劇事典』、新水社、1999年。

平井博『オスカー・ワイルドの生涯』、松柏社、1960年。

ピニャール、ロベール（岩瀬孝訳）『世界演劇史』、白水社、1969年。

メイ、ロビン（佐久間康夫編訳）『世界演劇事典』、開文社出版、1999年。

山田勝『イギリス貴族—ダンディたちの美学と生